

高瀬舟は京都の高瀬川を上下する小舟である。徳川時代に京都の罪人が遠島を申し渡されると、本人の親類が牢屋敷へ呼び出されて、そこで暇乞いをすることが許された。それから罪人は高瀬舟に載せられて、大阪へ回されることであつた。それを護送するのは、京都町奉行の配下にいる同心で、この同心は罪人の親類の中で、おも立つた一人を大阪まで同船させることを許す慣例であつた。これは上へ通つた事ではないが、いわゆる大目に見るのであつた、默許であつた。

当時遠島を申し渡された罪人は、も

ちろん重い科を犯したものと認められた人ではあるが、決して盗みをするために、人を殺し火を放つたというような、獰悪な人物が多数を占めていたわけではない。高瀬舟に乗る罪人の過半は、いわゆる心得違いのために、思わぬ科を犯した人であつた。有りふれた例をあげてみれば、当時一相対死と言った情死をはかつて、相手の女を殺して、自分だけ生き残つた男というような類である。

そういう罪人を載せて、入相の鐘の鳴るころにこぎ出された高瀬舟は、黒ずんだ京都の町の家々を両岸に見つ

つ、東へ走つて、加茂川を横ぎつて下るのであつた。この舟の中で、罪人とその親類の者は夜どおし身の上を語り合う。いつもいつも悔やんでも返らぬ繰り言である。護送の役をする同心は、そばでそれを聞いて、罪人を出した親戚眷族の悲惨な境遇を細かに知ることができた。所詮町奉行の白州で、表向きの口供を聞いたり、役所の机の上で、口書を読んだりする役人の夢にもうかがうことのできぬ境遇である。

同心を勤める人にも、いろいろの性質があるから、この時ただうるさいと

思つて、耳をおおいたく思う冷淡な同心があるかと思えば、またしみじみと人の哀れを身に引き受け、役がらゆえ氣色には見せぬながら、無言のうちにひそかに胸を痛める同心もあつた。場合によつて非常に悲惨な境遇に陥つた罪人とその親類とを、特に心弱い、涙もうい同心が宰領してゆくことになると、その同心は不覚の涙を禁じ得ぬのであつた。

そこで高瀬舟の護送は、町奉行所の同心仲間で不快な職務としてきらわれていた。

いつのころであつたか。たぶん江戸

で白河樂翁侯が政柄を執つていた寛政のころで、でもあつただろう。智恩院の桜が入相の鐘に散る春のタベに、これまで類のない、珍しい罪人が高瀬舟に載せられた。

それは名を喜助と言つて、三十歳ばかりになる、住所不定の男である。もとより牢屋敷に呼び出されるような親類はないので、舟にもただ一人で乗つた。

護送を命ぜられて、いっしょに舟に乗り込んだ同心一羽田庄兵衛は、ただ喜助が弟殺しの罪人だということだけを聞いていた。さて牢屋敷から棧橋

まで連れて来る間、この瘦肉の、色の青白い喜助の様子を見るに、いかにも神妙に、いかにもおとなしく、自分をば公儀の役人として敬つて、何事につけても逆らわぬようにしている。しかもそれが、罪人の間に往々見受けるよう、温順を装つて権勢に媚びる態度ではない。

庄兵衛は不思議に思つた。そして舟に乗つてからも、単に役目の表で見張つているばかりでなく、絶えず喜助の挙動に、細かい注意をしていた。

その日は暮れ方から風がやんで、空一面をおおつた薄い雲が、月の輪郭を

かすませ、ようよう近寄つて来る夏の温かさが、両岸の土からも、川床の土からも、もやになつて立ちのぼるかと思われる夜であつた。下京の町を離れて、加茂川を横ぎつたころからは、あたりがひつそりとして、ただ舳にさかれる水のささやきを聞くのみである。

夜舟で寝ることは、罪人にも許されているのに、喜助は横になろうともせず、雲の濃淡に従つて、光の増したり減じたりする月を仰いで、黙つてゐる。その額は晴れやかで目にはかすかなかがやきがある。

庄兵衛はまともには見ていぬが、始

終喜助の顔から目を離さずにいる。そして不思議だ、不思議だと、心の内で繰り返している。それは喜助の顔が縦から見ても、横から見ても、いかにも楽しそうで、もし役人にに対する気がねがなかつたなら、口笛を吹きはじめるとか、鼻歌を歌い出すとかしそうに思われたからである。

庄兵衛は心の内に思つた。これまでこの高瀬舟の宰領をしたことは幾たびだか知れない。しかし載せてゆく罪人は、いつもほとんど同じように、人も当てられぬ気の毒な様子をしていた。それにこの男はどうしたのだろう。

遊山船にでも乗ったような顔をしている。罪は弟を殺したのだそ、うだが、よしやその弟が悪いやつで、それをどんなゆきがかりになつて殺したにせよ、人の情としていい心持ちはせぬはずである。この色の青いやせ男が、その人の情というものが全く欠けているほどの、世にもまれな悪人であろうか。どうもそ、うは思われない。ひょつと気でも狂っているのではあるまいか。いやいや。それにしては何一つじつまの合わぬことばや挙動がない。この男はどうしたのだろう。庄兵衛がためには喜助の態度が考えれば考え

るほどわからなくなるのである。

しばらくして、庄兵衛はこらえ切れなくなつて呼びかけた。「喜助。お前何を思つているのか。」

「はい」と言つてあたりを見回した喜助は、何事をかお役人に見とがめられたのではないかと氣づかうらしく、居ずまいを直して庄兵衛の気色を伺つた。

庄兵衛は自分が突然問いを発した動機を明かして、役目を離れた応対を求める言いわけをしなくてはならぬように感じた。そこでこう言つた。「いや。別にわけがあつて聞いたのではない

い。実はな、おれはさつきからお前の島へゆく心持ちが聞いてみたかつたのだ。おれはこれまでこの舟でおおぜいの人を島へ送った。そればずいぶんいろいろな身の上の人だつたが、どれもどれも島へゆくのを悲しがつて、見送りに来て、いつしょに舟に乗る親類のものと、夜どおし泣くにきまつていた。それにお前の様子を見れば、どうも島へゆくのを苦にしてはいないようだ。いつたいお前はどう思つているのだい。」

喜助はにつこり笑つた。「御親切におっしゃつてください笑つて、ありがとう

ござります。なるほど島へゆくという  
ことは、ほかの人には悲しい事でござ  
いましょう。その心持ちはわたくしに  
も思いやつてみるとことができます。し  
かしそれは世間でらくをしていた人  
だからでござります。京都は結構な土  
地ではござりますが、その結構な土地  
で、これまでわたくしのいたして参つ  
たような苦しみは、どこへ参つてもな  
かるうと存じます。お上の慈悲で、  
命を助けて島へやつてくださいます。  
島はよしやつらい所でも、鬼のすむ所  
ではござりますまい。わたくしはこれ  
まで、どこといつて自分のいていい所

というもののがござりませんでした。こ  
ん度お上で島にいようとおっしゃつて  
くださいます。そのいとおっしゃる  
所に落ち着いていることができま  
のが、まず何よりもありがたい事でござ  
ります。それにわたくしはこんなに  
かよわいからだではございますが、つ  
いぞ病気をいたしたことばございま  
せんから、島へ行つてから、どんなつ  
らい仕事をしたつて、からだを痛める  
ようなことはあるまいと存じます。そ  
れからこん度島へおやりくださるに  
つきまして、二百一文の鳥印をいただ  
きました。それをここに持つておりま

す。」こう言いかけて、喜助は胸に手を当てた。遠島を仰せつけられるものには、鳥目二百銅をつかわすというのは、当時の撃であつた。

喜助はことばをついだ。「お恥ずかしい事を申し上げなくてはなりませんが、わたくしは今日まで二百文というお足を、こうしてふところに入れて持っていたことはございません。どこかで仕事に取りつきたいと思つて、仕事を尋ねて歩きまして、それが見つか  
り次第、骨を惜しまずに働きました。  
そしてもらつた銭は、いつも右から左へ人手に渡さなくてはなりません

だ。それも現金で物が買って食べられる時は、わたくしの工面のいい時で、たいていは借りたものを返して、またあとを借りたのでございます。それがお牢にはいつてからは、仕事をせずに食べさせていただきます。わたくしはそればかりでも、お上に対して済まない事をいたしているようになります。それにお牢を出る時に、この二百文をいただきましたのでございます。こうして相変わらずお上の物を食べていて見ますれば、この二百一文はわたくしが使わずに持っていることができます。お足を自分の物にして持つ

て いると い うこ と は、わたくしにとつ  
ては、こ れが 始めで ござ い ま す。島へ  
行つて みま すま で は、どん な仕事 がで  
きるか わかりま せんが、わたくし はこ  
の二 百文 を島 で す べく 仕事 の本 手 にし  
よ うと 楽し ん で お りま す。」こ う言つ  
て、喜 助は 口を つぐ んだ。

庄 兵衛 は「うん、そ うかい」と は言  
つたが、聞 く事 ごと に あ ま い意 表 に 出  
たの で、こ れも し ばらく 何 も 言 うこ  
と が でき ず に、考 考え込 ん で 黙つ て いた。

庄 兵衛 は か れ こ れ 初老 に 手 の 届く  
年 に なつ て い て、も う女 房 に 子供 を 四  
人 生 ま せ て い る。そ れ に 老母 が 生 き て

いるので、家は七人暮らしである。平生人には吝嗇と言われるほどの、僕約な生活をしていて、衣類は自分が役目のために着るもののはか、寝巻しかこしらえぬくらいにしている。しかし不幸な事には、妻をいい身代の商人の家から迎えた。そこで女房は夫のもらう扶持米で暮らしが立ててゆこうとする善意はあるが、ゆたかな家にかわいがられて育った癖があるので、夫が満足するほど手元を引き締めて暮らしてゆくことができない。ややもすれば月末になつて勘定が足りなくなる。すると女房が内証で里から金を持つて

来て帳尻を合わせる。それは夫が借財  
というものを毛虫のようにきらうか  
らである。そういう事は所詮夫に知れ  
ずにはいない。庄兵衛は五節句だと言  
つては、里方から物をもらい、子供の  
七五三の祝いだと言つては、里方から  
子供に衣類をもらうのでさえ、心苦し  
く思つてはいるのだから、暮らしの穴を  
うめてもらつたのに気がついては、い  
い顔はしない。格別平和を破るような  
事のない羽田の家に、おりおり波風の  
起ころのは、これが原因である。

庄兵衛は今喜助の話を聞いて、喜助  
の身の上をわが身の上に引き比べて

みた。喜助は仕事をして給料を取つても、右から左へ人手に渡してなくしてしまふと言つた。いかにも哀れな、気の毒な境界である。しかし一転してわが身の上を顧みれば、彼と我れとの間に、はたしてどれほどの差があるか。自分も上からもう扶持米を、右から左へ人手に渡して暮らしているに過ぎぬではないか。彼と我れとの相違は、いわば十露盤の桁が違つてゐるだけで、喜助のありがたがる二百一文に相当する貯蓄だに、こつちはないのである。

さて桁を違えて考えてみれば、鳥目

二百文をでも、喜助がそれを貯蓄と見て喜んでいるのに無理はない。その心持ちはこつちから察してやることができる。しかしいかに桁を違えて見てみても、不思議なのは喜助の欲のないこと、足ることを知っていることである。

喜助は世間で仕事を見つけるのに苦しんだ。それを見つけさえすれば、骨を惜しまず働くて、ようよう口を糊することのできるだけで満足した。そこで牢に入つてからは、今まで得がたかつた食が、ほとんど天から授けられるように、働くて得られるのに驚

いて、生まれてから知らぬ満足を覚えたのである。

庄兵衛はいかに桁を違えて考えてみても、ここに彼と我れとの間に、大いなる懸隔のあることを知った。自分の扶持米で立ててゆく暮らしさ、おりおり足らぬことがあるにしても、たいてい出納が合っている。手いっぱいの生活である。しかるにそこに満足を覚えたことはほとんどない。常は幸いとも不幸とも感ぜずに過ぎしている。しかし心の奥には、こうして暮らしていって、ふいとお役が御免になつたらどうしよう、大病にでもなつたらどうしよ

うという疑懼が潜んでいて、おりおり妻が里方から金を取り出して来て穴うめをしたことなどがわかると、この疑懼が意識の闇の上に頭をもたげて来るのである。

いつたいこの懸隔はどうして生じて来るだろう。ただ上べだけを見て、それは喜助には身に係累がないのに、こつちにはあるからだと言つてしまえばそれまでである。しかしそれはうそである。よしや自分が一人者であつたとしても、どうも喜助のような心持ちにはなられそうにない。この根底はもつと深いところにあるようだと、庄

兵衛は思つた。

庄兵衛はただ漠然と、人の一生というような事を思つてみた。人は身に病があると、この病がなかつたらと思う。その日その日の食がないと、食つてゆかれたらと思う。万一の時に備えるたくわえがないと、少しでもたくわえがあつたらと思う。たくわえがあつても、またそのたくわえがもつと多かつたらと思う。かくのごとくに先から先へと考えてみれば、人はどこまで行つて踏み止まることができるものやらわからない。それを今目の前で踏み止まつて見せてくれるのがこの喜助だと、

庄兵衛は気がついた。

庄兵衛は今さらのように驚異の目をみはつて喜助を見た。この時庄兵衛は空を仰いでいる喜助の頭から毫光がさすように思つた。

庄兵衛は喜助の顔をまもりつつまた、「喜助さん」と呼びかけた。今度は「さん」と言つたが、これは充分の意識をもつて称呼を改めたわけではない。その声がわが口から出てわが耳に入るや否や、庄兵衛はこの称呼の不穏当なのに気がついたが、今さらすでに出了ことばを取り返すこともできなかつた。

「はい」と答えた喜助も、「さん」と呼ばれたのを不審に思うらしく、おそるおそる庄兵衛の氣色をうかがつた。

庄兵衛は少し間の悪いのをこらえて言った。「いろいろの事を聞くようだが、お前が今度島へやられるのは、人をあやめたからだという事だ。おれについてにそのわけを話して聞せてくれぬか。」

喜助はひどく恐れ入った様子で、「かしこまりました」と言つて、小声で話し出した。「どうも飛んだ心得違いで、恐ろしい事をいたしまして、な

んとも申し上げようがござりませぬ。  
あとで思つてみますと、どうしてあん  
な事ができたかと、自分ながら不思議  
でなりませぬ。全く夢中でいたしまし  
たのでござります。わたくしは小さい  
時に二親が時疫でなくなりまして、弟  
と二人あとに残りました。初めはちょ  
うど軒下に生まれた犬の子にふびん  
を掛けるように町内の人たちがお恵  
みくださいますので、近所じゅうの走  
り使いなどをいたして、飢え凍えもせ  
ずに、育ちました。次第に大きくなり  
まして職を捜しますにも、なるたけ二  
人が離れないようにいたして、いつし

よにいて、助け合つて働きました。去年の秋の事でございます。わたくしは弟といつしょに、西陣の織場にはいりまして、空引きといふことをいたすことになりました。そのうち弟が病気で働けなくなつたのでございます。そのころわたくしどもは北山の掘立小屋同様の所に寝起きをいたして、紙屋川の橋を渡つて織場へ通つておりましたが、わたくしが暮れてから、食べ物などを買って帰ると、弟は待ち受けていて、わたくしを一人でかせがせてはすまないすまないと申しております。ある日いつものように何心なく帰

つて見ますと、弟はふとんの上に突つ伏していまして、周囲は血だらけなのでござります。わたくしはびっくりいたして、手に持っていた竹の皮包みや何かを、そこへおっぽり出して、そばへ行つて『どうしたどうした』と申しました。すると弟はまつ青な顔の、両方の頬からあごへかけて血に染まつたのをあげて、わたくしを見ましたが、物を言うことができませぬ。息をいたすたびに、傷口でひゅうひゅうという音がいたすだけでござります。わたくしにはどうも様子がわかりませんので、『どうしたのだい、血を吐いたの

かい』と言つて、そばへ寄ろうとした  
すと、弟は右の手を床に突いて、少しつ  
からだを起こしました。左手はしつ  
かりあごの下の所を押えていますが、  
その指の間から黒血の固まりがはみ  
出しています。弟は目でわたくしのそ  
ばへ寄るのを留めるようにして口を  
ききました。ようよう物が言えるよう  
になつたのでござります。『すまない。  
どうぞ堪忍してくれ。どうせなおりそ  
うにもない病氣だから、早く死んで少  
しでも兄きにらくがさせたいと思つ  
たのだ。笛を切つたら、すぐ死ねるだ  
ろうと思つたが息がそこから漏れる

だけで死ねない。深く深くと思つて、力いっぱい押し込むと、横へすべつてしまつた。刃はこぼれはしなかつたようだ。これをうまく抜いてくれたらおれは死ねるだらうと思つてゐる。物を言うのがせつなくなつていけない。どうぞ手を借して抜いてくれ』と言うのでござります。弟が左の手をゆるめるとそこからまた息が漏ります。わたくしはなんと言おうにも、声が出ませんので、黙つて弟の喉の傷をのぞいて見ますと、なんでも右の手に剃刀を持って、横に笛を切つたが、それでは死に切れなかつたので、そのまま剃刀を、えぐ

るよう に深く突っ込んだものと見え  
ます。柄がやつと二寸ばかり傷口から  
出て います。わたくしはそれだけの事  
を見て、どうしようという思案もつか  
ずに、弟の顔を見ました。弟はじつと  
わたくしを見詰めています。わたくし  
はやつとの事で、『待つていてくれ、  
お医者を呼んで来るから』と申しまし  
た。弟は恨めしそうな目つきをいたし  
ましたが、また左の手で喉をしつかり  
押えて、『医者がなんになる、あゝ苦  
しい、早く抜いてくれ、頼む』と言う  
のでござります。わたくしは途方に暮  
れたような心持ちになつて、ただ弟の

顔ばかり見ております。こんな時は、不思議なもので、目が物を言います。弟の目は『早くしろ、早くしろ』と言つて、さも恨めしそうにわたくしを見ています。わたくしの頭の中では、なんだからこう車の輪のような物がぐるぐる回つているようでございましたが、弟の目は恐ろしい催促をやめません。それにその目の恨めしそうなのがだんだん険しくなつて来て、とうとう敵の顔をでもにらむような、憎々しい目になつてしまします。それを見ていて、わたくしはどうとう、これは弟の言つたとおりにしてやらなくてはな

らないと思いました。わたくしは『しかたがない、抜いてやるぞ』と申しました。すると弟の目の色がからりと変わつて、晴れやかに、さもうれしそうになりました。わたくしはなんでもひと思いにしなくてはと思つてひざを撞くようにしてからだを前へ乗り出しました。弟は突いていた右の手を放して、今まで喉を押えていた手のひじを床に突いて、横になりました。わたくしは剃刀の柄をしつかり握つて、ずっと引きました。この時わたくしの内から締めておいた表口の戸を開けて、近所のばあさんがはいつて来ました。

留守の間、弟に薬を飲ませたり何かしててくれるよう、わたくしの頼んでおいたばあさんなのでござります。もうだいぶ内のなかが暗くなつていましたから、わたくしにはばあさんがどれだけの事を見たのだかわかりませんでしたが、ばあさんはあつと言つたきり、表口をあけ放しにしておいて駆け出してしまいました。わたくしは剃刀を抜く時、手早く抜こう、まっすぐには抜こうというだけの用心はいたしましたが、どうも抜いた時の手ごたえは、今まで切れていた所を切つたように思われました。刃が外のほうへ

向いていましたから、外のほうが切れたのでございましょう。わたくしは剃刀を握ったまま、ばあさんのはいって来てまた駆け出して行つたのを、ぼんやりして見ておりました。ばあさんが行つてしまつてから、気がついて弟を見ますと、弟はもう息が切れています。傷口からはたいそうな血が出ておりました。それから年寄衆がおいでになつて、役場へ連れてゆかれますまで、わたくしは剃刀をそばに置いて、目を半分あいたまま死んでいる弟の顔を見詰めていたのでございます。」少しうつ向きかげんになつて庄兵

衛の顔を下から見上げて話していた  
喜助は、こう言つてしまつて視線をひ  
ざの上に落とした。

喜助の話はよく条理が立っている。  
ほとんど条理が立ち過ぎていると言  
つてもいいくらいである。これは半年  
ほどの間、当時の事を幾たびも思い浮  
かべてみたのと、役場で問われ、町奉  
行所で調べられるそのたびごとに、注  
意に注意を加えてさらつてみさせら  
れたのとのためである。

庄兵衛はその場の様子を目の人あた  
り見るような思いをして聞いていた  
が、これがはたして弟殺しというもの

だろうか、人殺しというものだろうか  
という疑いが、話を半分聞いた時から  
起こつて来て、聞いてしまっても、そ  
の疑いを解くことができなかつた。弟  
は剃刀を抜いてくれたら死なれるだ  
ろうから、抜いてくれと言つた。それ  
を抜いてやつて死なせたのだ、殺した  
のだとは言われる。しかしそのままに  
しておいても、どうせ死ななくてはな  
らぬ弟であつたらしい。それが早く死  
にたいと言つたのは、苦しさに耐えな  
かつたからである。喜助はその苦を見  
ているに忍びなかつた。苦から救つて  
やろうと思つて命を絶つた。それが罪

であろうか。殺したのは罪に相違ない。  
しかしそれが苦から救うためであつ  
たと思うと、そこに疑いが生じて、ど  
うしても解けぬのである。

庄兵衛の心の中には、いろいろに考  
えてみた末に、自分よりも上のものの  
判断に任すほかないという念、オオト  
リテエに従うほかないという念が生  
じた。庄兵衛はお奉行様の判断を、そ  
のまま自分の判断にしようと思つた  
のである。そうは思つても、庄兵衛は  
まだどこやらにふに落ちぬものが残  
つてゐるので、なんだかお奉行様に聞  
いてみたくてならなかつた。

次第にふけてゆくおぼろ夜に、沈黙の  
人一二人を載せた高瀬舟は、黒い水  
の面をすべて行つた。